

第33回BELCA賞 ロングライフ部門選考評

BELCA賞選考委員会 副委員長 深尾 精一

今回のBELCA賞表彰件数10件の中で、ロングライフ部門で表彰されたものは、4件であった。昨年まではベストリフォーム部門の表彰件数が多くなる傾向が続いていたが、今年は半数近くに戻っている。

4つの建築の建設年をみると、戦前に建設されたものが2件であり、1927年の竣工と1930年の竣工の建築である。鉄筋コンクリート造の建築が本格的に建設されるようになった時代のものと言えよう。一方、戦後に建設されたものも2件が選ばれているが、1956年から1966年にかけて建設された群建築と、1964年竣工の建築であり、竣工後50年を遥かに超えているものである。いずれも、所有者によって大切に使用されており、愛されてきた建築である。用途は住宅・学校建築・庁舎建築・商業建築と、バラエティに富んだものが選ばれている。

「旧山口萬吉邸 (kudan house)」は、個人の住宅として1927年に建設された鉄筋コンクリートの住宅で、内藤多仲、木子七郎、今井兼次らによって設計されたということでも、貴重な建築である。スパニッシュ様式の特徴が活かされた住宅であり、この建物を引き継いだ所有者の、存続させたいという強い希望と、それを受けた事業者・設計者の努力によって、会員制のビジネスイノベーション拠点としての活用が行われている。そのことこそが、この建築のロングライフ化の大きなポイントであり、順調に運用されていることが高く評価できる。設備等も、その活用に資するように整備されているが、当初の器具などが保存されていることも好ましい点である。

「立教女学院 高等学校校舎・講堂」は、関東大震災後に現在地である久我山に移転することになり1930年に建設された女子高等学校の校舎である。90年を経過した建築であるが、これからの100年に備えて、大規模な改修が行われている。各種設備も、創建当時の形に近づけながら手が入られ、内装仕上げは剥落防止など、維持保全が確実になされるように手が加えられている。それらの改修を、創建時の佇まいを大切にしながら進めており、ロングライフと呼ぶのに相応しい建築となっている。

「広島県庁舎本館、南館、議事堂、北館、農林庁舎」は、戦後の広島の復興のシンボルとすべく、意欲的に造られた庁舎建築群である。当時の現代建築の特徴を備えたデザインで、敷地の中に伸びやかに配置されている。庁舎として求められる防災拠点機能の強化のため、耐震補強、液状化対策などがなされているが、県民に親しまれてきた雰囲気は損なうことなく、壁柱等が付加されている。この時代に建設された庁舎建築のいくつかのものの解体が計画されている中、長寿命化の取り組みが確実に進められていることは高く評価される。

「紀伊國屋ビルディング」は、前川國男の設計によって1947年に建設された木造の書店を建て替える形で、1964年に同じ前川國男によって設計された、ホールを持つ商業建築である。1960年代の前川建築の特徴を持ちながら、公共建築でないという点でも、貴重な建築である。今後とも文化、芸術、情報の発信拠点となるべく、保存活用が決断されたが、短辺方向に耐震壁を入れる耐震補強が必要であった。その壁の書籍売り場への設け方など、意欲的な改修が行われているが、打ち込みタイルなど、前川建築の特徴は維持され続けている。ロングライフの手本の一つとなることが期待される建築である。

以上のように、今回のロングライフ部門の表彰対象は、所有者のみならず、利用者によっても愛され続けてきた建築であり、ロングライフ化のための使い方に関する様々な取り組みも、興味深いものであった。建築物の用途としても、バラエティに富んだものが選ばれており、ロングライフ化を図るための参考となる事例が選ばれているといえよう。